

八田木枯句集

Hatta  
Kogarasi

夜さり

本集は私の七十代の作品集で  
当然の事乍ら老の句もかなり収  
めてある。老の句を意識して詠  
まないという人もいるが、ここ  
までくれば極く自然に老を詠め  
ばいいと私は思っている。青春  
の日に青春を讃えて詠んだよう  
に、滋味ふかき老を詠みこなし  
たいと念じている。

八田木枯

角川書店

創立60周年記念

角川俳句叢書

42



う  
な  
さ  
か



初ゆめのさめかかりたる糸紅し

年頭の濤がかぶさる置かな

何も無きことなどはなし初景色

濤一つ落ちて歌留多の夜が沈む

かの懸り羽子も夜雨にしづくすや

歌留多とる針やまに針刺してきて

鳥追がけふ櫃坂を越え來しと

鳥追の手甲の紺の籠えにけり



獅子の笛ながれてひるの刻くづれ

誰ッ彼レの獅子の遠笛いたく寂び

初ゆめにいろありていろすあさぎ

歌々と母と柱や花歌留多

御形摘む大和島根を膝に敷き

箱に入るくぐつの髪は溢れけり

初ゆめの箒ともども倒れけり

野にふかく少年鳳巾を甚振りぬ

鬼房逝く砂に寒星ぶちまけて

松過ぎの附箋の手紙濡れて着く

手毬うた一つおぼえをさげすまれ

手毬つきつつ針千本をのまさるる

いとけなき数の手毬をついて見せ

手毬つく兒のない子がひとりゐて

ふるさとの紙鳶は糸より暮れにけり

ふるさとや風のすさびも枕上ミ



戦争のさかなころの獨樂の紐

菘蘿葡萄寂しさことの他ならず

まうしろに思ひのとどく氷頭膾

すがたなく声を見せあふ匂ひ鳥

酔を打つてゐるとき春の風邪ごこち

鶴は引く人差指のあひだより

朥をして紅梅の花のかず

生半老いて海いり参こに手をつけず

見えて降る雨にもどりぬ小水葱摘

鯖ごち吹きくづれたるきのふかな

鳥 帰る 波の うしろも濡れてゐて

う な さ か を の ぼ り つ め た る 朝 寝 か な

ひるよりも夜に旬あり魚田食ふ

淡雪の大きさは略きまりけり

さざ波はかへらざる波春ならひ

鶴は引くこころのなかに灯を入れて



見えてゐる人みなうごき水温む

浅葱はゆふべのいろとまぎらはし

老人の背に貼りつきし余寒かな

雪どけの仔細の朝でありにけり

三月を路地の奥より繙きし

引鶴の消えてしまひし飲み門かな

雛鮓の黄のことさらにおごりたる

ゆく雁の翅のうらよりナフタリソ

うすらひや空がもみあふ空のなか

しづかさをかこめる空や浮き氷

野遊びに家の柱を連れてきし

何んとかたちよろしき雛の日よ

朧かや岡持のなか小ゆれして

山すそは山を見せずに匂ひ鳥

春眠のなかぬけてゆくしつけ糸

痴をこそぐる雁の別れかな



あめつちのいづれともなし浮き氷

春なれや生きて忌日にかこまるる

春はあけぼの秋は日ぐれの落し紙

うなさかに朝寝の枕捨ててきし

雛の日の横みちを來て家に入る

草莽と言ふべき雛の夜なりけり

櫻もちやはらかきまま夜雨いたる

木蓮や肌と肌着にあはひあり

まちまちに降つて降りやむ春の雪

おぼろにもいくつかのいろすべにも

朝寝して伊勢の苦屋の貝すだれ

永き日を思ひあまして翅ふやす

鶯を聞いて濡れたる家に入る

摘草の帰りは糸にあやつられ

春やむかし騙されてゐしサーカスよ

そぞろ出て家に空ありお中日



永き日や箒に母をひそませる

風立ちぬいざまんさくの花のかず

草遊び空より道を抽き出せり

草遊び帰りは雲と手をつなぎ

水に散りひろがる黄<sup>ナ</sup>粉百千鳥

永き日の土はあかるきままに暮れ

日  
が  
落  
ち  
て  
風  
が  
も  
の  
言  
ふ  
雛  
を  
さ  
め

鞦  
韆  
を  
ゆ  
ら  
し  
て  
老  
を  
鞦  
し  
け  
り

貝寄風はあまねく吹いて枝に熄む

何もせずゐて永き日を見透しぬ

永  
き  
日  
の  
上<sup>ほ</sup>枝<sup>つえ</sup>  
下<sup>し</sup>枝<sup>づえ</sup>  
と  
ゆ  
き  
亘  
る

春  
眠  
の  
波  
の  
一  
つ  
に  
魘  
さ  
る  
る

おぼろとはかぶくものどぞ白襖

寝くたれの花のもみあふ風の枝よ

春のくれ我も近所の人ならむ

隠元の匂を濡れたる雲とほる



月おぼろ痒きところへ手がゆかず

てすさびの春の夜風や橋は浮き

春眠のなかにほどよき竹のかず

花ぐもり小またと言ふはどこならむ

春愁やからまることのなき小ゆび

可惜夜のとばくちにゐる黄<sup>ナ</sup>粉鳥

白泉に銃後の句あり大櫻

海市まで道なき道を征きし友よ

うぐひすのこゑが障子にたまるかな

永き日の水は水べにはびこりぬ

櫻見にひるから走る夜汽車かな

戦勃るか春泥に釘ばらまかれ

永き日の夕日をさをさ愈らず

水いろといふは何いろ春の夕

春ふかし背<sub>ナ</sub>へ着物を落としぬぐ

革帯に搏たれしごとく春は闌け



母上におよばざれども瑠璃揚羽

井戸のぞくとき顔あり暮の春

日永さや死ぬまでは死を持ちつづけ

ゆく春の水はすがたのままに暮れ

山吹の黄みどりの黄が飽きさせず

春の日のわれ椅子にあり埒もなき

うつそみを掴みて春をやり過ごす

家うちをひろくつかつて春惜む

太虚より落ちて來しなり  
蜥蜴の尾

行春や涙をつまむ  
指のうら

羯諦きあていと啼なく死しにぎはの十じゅう一いちは

鱧なまこの皮かわねぢぢれてあるは許ゆるされず

徂春かな猫にかまける權未知子

しづくして大むらさきの病理かな

白桃や母なじるとき我薄れ

春ふかし粉<sub>ナ</sub>屋の裏は粉<sub>ナ</sub>まみれ



夜  
さ  
り



戦中をころげまはりしラムネ玉

空井戸にいつか捨てたる花あやめ

すれちがひたるは母ともあやめとも

麥秋は鳥のはらわたまで達す

うらがなしオキシドールと花あやめ

冷し桃うらがへりたる捨身かな

死ぬときに間に合はせたる花あやめ

よく濡れるものに空あり花卯ツ木

白桃は逢魔ヶ刻を羽撃きぬ

抱きあつて黄なる溪蓀になり下る

晴子死す祭遠  
笛聞きながし

あやめまじらば  
日暮を嗜むらし



母と寝て浅葱のいろを持ち合はす

あやめ咲く箱階段を突き上げて

枕頭をよぎりあやめに逢ひにゆく

落ちのびてゆく  
麥秋に布吹かれ

ぼ  
う  
た  
ん  
の  
面<sub>テ</sub>  
を  
兩  
手  
に  
て  
擡  
ぐ

銀  
ど  
ろ  
の  
ろ  
く  
ぐ  
わ  
つ  
鳥  
の  
肝  
を  
刺  
し

祭にはかかせぬ男水を撒く

犢鼻褌は一本といふ祭かな

冷し桃もの言ふことを封ぜられ

やや濃ゆく母に瓣ありあやめどき

更衣すめらみくには水に浮き

戀に死ねと仕掛花火の赤目瀧

衣食住のみか書寝も附いてゐし

浮橋をよくよくみればかきつばた

ろくぐわつの腐りはじめの鳥のこゑ

小夜ふけてあやめに修羅の走りけり



人死なぬ日のなかりけり氷水

櫻桃忌袖にされたるかの人よ

冷し桃人を殺めしことはなし

紺緋或る晴れし日の郡かな

亡き母とゐるろくぐわつの夕がれひ

忸怩たるろくぐわつ畢る貝柱

豊  
葦  
原  
千<sup>ち</sup>  
五<sup>い</sup>  
百<sup>ほ</sup>  
梅  
雨  
降  
る  
外  
厠

芒  
種  
か  
な  
水  
ぬ  
れ  
の  
ま  
ま  
鴉  
と  
び

白桃や死よりも死後がおそろしき

はつなつの思はせぶりな中ゆびよ

蹠を晝寝せし間に偷まれし

白扇を家のなかまで使つて來し

ふるさとの夜をうすめる籠まくら

古井戸をのぞけば夏の戦かな

とんでゐる鳥に數あり半夏生

ふるさとの用無しの井戸とはの夏



手にふれしものを労る大暑かな

次の世も假初めならむ白透綾

晝顔や死んで生きるといふ手あり

家うちの階段ぬれず夏の雨

白地着てこころは水に濡れてゐし

夏瘦せといふ季語かつて蔓<sup>は</sup>延<sup>び</sup>りし

やはらかに捕蟲網ごと攫はれたし

晝寝より覚めしところが現住所

天井のうへに天あり水中り

大川の夜を屢叩く葭障子

戦死して蚊帳のまはりをうろつきぬ

蚊帳の中まで亞米利加が焼いてゆきし

白蚊帳にきのふの我が死んでをり

蚊帳の環かち合ふ伊勢の澳邊かな

くちびるを空にさしだす夏日かな

しるしらぬひとのあかしの盆踊



手をあげることとも供養の踊かな

念佛踊こゑを落して手を空へ

盆踊佃はいまも水まみれ

人老いて供養踊の手をふやす

送りまぜ  
厠の中を  
ふかめたる

抜け露地をぬけて  
佃の盆さかん

盆の月ひるのあかるさもちこたへ

盆唄は舟唄にして唄れし

てのひらに雨をたしかむ魂迎

羅や夕日といふはないがしろ

盆の月くすりのごとく雫せり

瓜の馬あはれ水べに腐りたる

青蘆の剛きそよぎの晩景か

おほぞらをひろくこなして盆の月

とまるまで鳥はとんで魂まつり

名忘れの顔のいくつか盆踊



蝮 蛄 鳴くと言ひし男に詰めよりぬ

寝 冷 人 ま な こ で 凝 と 我 を 見 る

白晝といふも闇なり瓜の馬

まひるまの切子の形なりの盲ひけり

白切子夜に入るとき身を聞く

切子燈籠土のなかまで影をさす

朝すでに藻屑となりし母衣蚊帳よ

夏久し小糠といふは雨のこと

あけがたの幟のなかまでけものみち

白洲にて晝寝の母をゆりおこす

少年は必ず老いて夏惜む

白地着て雲に紛ふも夜さりかな

火の入りし切籠は紙に攻めこまる

人なりに人は老いけり花めうが

まつたてに少年走る夏のくれ

両手もて口塞がれし冷し桃



はつたいは不承不承とこぼれけり

少年は蕩ける夏の限りかな

正体の無くなるまでに桃冷えし

一葉落つ柱のうらのけだるさに

貝の蓋



父老いて銀漢の尾を捌きをり

月のぼりくる兩袖をふりしぼり

月光は箒のごとくあわただし

男ごゑよかりしむかし蟲送り

翅うらは濡れずじまひの小夜の雁

しがらみと言へば戀なり冷し葛

老人を巻きこんでゆくけいとう花

月光がくる釘箱をたづさへて



蟲の夜の御櫃の籜の弛みかな

軍服はたるみ銀河にぶらさがる

萩紅ししだるる花をゆるがせに

天の川われも鱗はしろがねぞ

人老いて月夜の夢をたべし夢

待つとなく素逝忌がくる數珠玉よ

ふるさとや柱を齧るきりぎりす

雁病んで畳の縁を通りけり

とことはに月ぶらさがる物ならむ

我が入る墓もきめずに墓参り

夜<sup>よ</sup>興<sup>こ</sup>引<sup>び</sup>や飯<sup>び</sup>嚙<sup>き</sup>む顎<sup>あご</sup>のかつかつと

月<sup>つき</sup>よりも古<sup>ふる</sup>きものなし抱<sup>かか</sup>きまくら

情<sup>つれ</sup>  
な  
く  
て  
う  
ご  
き  
づ  
く  
め  
の  
水  
の  
月

病  
雁  
を  
庇  
ふ  
襖  
を  
引  
き  
に  
け  
り

帝劇の舞台に雨や幸彦逝く

朝の雁こぼしたる數おぎなはず



障子しめて物にかかはること了る

はるばるときて雨月なり貝の蓋

ふたりして笑うてをりぬ墓参人

まなじりに墓参の人をうかがひぬ

生きてゐるうちは老人雁わたし

蟲繁くなる身のうちの痼かな

秋ふかし眼をやるたびに水は濡れ

夜晩くかりがね病むを告げにきし

墓 参 人 面<sub>テ</sub> を 白 く 曝 さ れ し

月 光 は は ば た き 水 に 火 傷 せ り

行き暮れて萩の下枝の鬼房よ

いざよひとなりて消えゆく水泡や

天の川熟ゆざまし水は死のごとく在り

綴れ刺せ母を金輪際庇ふ

色鳥が畳つめたくして去りぬ

かりがねのきのふや紅き紐まぎれ



掃苔の帰りちちはは手をつなぎ

秋の夜の火を落とすてふ奥のこゑ

秋  
ふ  
か  
し  
雨  
と  
い  
ふ  
字  
は  
雫  
し  
て

襦  
襠  
に  
ま  
ぎ  
れ  
こ  
み  
た  
る  
病  
雁  
よ

お  
迎  
へ  
の  
提  
灯  
が  
く  
る  
む  
く  
げ  
色

肝  
臓  
も  
漆  
紅  
葉  
も  
よ  
く  
濡  
れ  
て

十三夜ならで墨田の蜷殻

花川戸ニタ夜の月のはざまかな

銀泥の一夜たりけり菊供養

うすらひのごとく空あり菊の塵

笄をひるの銀河に匿しおく

子どもには子どもが見えて秋のくれ

秋のくれ途方に暮れしにはあらず

きりぎりす繙帯よりもむずがゆき

菊月の水のゆくへの井桁かな

鴉晴やものを拾ふに影かめ



桃  
ほ  
ど  
に  
腐いた  
ま  
ず  
に  
柿  
寂いた  
び  
に  
け  
り

深  
秋  
の  
人  
を  
お  
も  
へ  
ば  
遠  
ざ  
か  
る

憂國忌列を亂してゐるは誰ぞ

深爪をして鶴わたる夜を過ごす

螺<sup>す</sup>  
贏<sup>がる</sup>  
女<sup>め</sup>  
や  
中  
洲  
の  
蘆  
を  
刈  
り  
忘  
れ

障  
子  
し  
め  
て  
人  
は  
雫  
に  
な  
り  
に  
け  
り

殘菊の紅のすたれも花川戸

おほぞらは微熱なりけり穴惑ひ

枕べを火照る火照ると鶴が過ぐ

文机の端より萩は黄ばみけり

殘年やあらき思ひに障子見る

鶴の手をひいてよこぎる奥座敷

赤わたを二の句もつかず啜りこむ

盲ふまでまひるの萩は刈られけり

鶴わたりゆく振り假名をこぼしつつ

寝入りばな葱の白さに搏たれたる



人老いて障子の夜をなくづくす

ひる啼いて夜のコゑする秋沙かな

空はまた時雨づもりや貝の蓋

日の暮をととのへてゐる障子かな

夕風邪やこころおきなく雲ながれ

ひるながら黒衣なりけり木賊刈

鏡  
荒  
れ  
鶴  
は  
た  
ち  
ま  
ち  
妊  
り  
ぬ

風  
邪  
ご  
こ  
ち  
し  
て  
み  
を  
つ  
く  
し  
み  
を  
つ  
く  
し

鳥たちや見せ場をつくる秋のくれ

おなじ人ふたりとはるゐず暮の秋

不  
忍  
や  
鴨  
の  
こ  
ゑ  
す  
る  
小  
抽  
斗

梟  
が  
み  
じ  
か  
き  
着  
物  
き  
せ  
く  
れ  
し

家裏で鶴手なづけし少年よ

荒淫か火事のありたるひる下り

水 洩 や ど こ に む よ う と 日 は 西 に

か そ け さ が 障 子 の 棧 に 流 れ を り



家々はうつむきがちに夜の餅

むらさきにちかきくれなる鶴の疵

太陽は古く新し敏雄の日

風邪もらひたるゆふぐれは萌黄いろ

木賊刈顔のなかよりもの言ひし

ゆふぐれの木がらしは血をまぜて吹く

冬雁や夕日あびれば誰も老い

根深引く男といふは煙なり

天災にまさる戦災白障子

短日の障子あかりの靠れ合ふ

つはぶきの黄におよびたる二伸かな

風邪の身を置きざりにして水暮るる

鶴守は藪し藪しとねむりけり

木賊刈鏡を割つてあらはるる

赤わたといふは阿漕なものならむ

虎落笛抱き抱かれして人は老い



雪の暮さばかるるもの何も無し

かたちなき物には雪のこぞり降る

龍の玉こぼれて人は冴ゆるかな

青海鼠拗ねてこの世の爲ならず

織きものは雪かと母に尋ねらる

木賊刈まとひしものありあはせ

年とつて雪の日ぐれや徒に過ぐ

羊齒刈は夕日くすねて帰りけり

数学はみじめなりけり雪被り

氷魚捕が細みの発句ものにせし

夜に降る雪こそ雪と思はるる

人戀ひのかたちには鶴は凍りけり

龍の鬚墨はいたいけなく減りぬ

かたち見せ雪がふるふる夕がれひ

雪泥みたる晩年の夜空かな

鶴守の咽にあをき棘刺さる



好雪や母よりわれは古くなし

鱺子酔手もと不如意とつぶやける

天  
す  
で  
に  
本  
降  
り  
な  
ら  
む  
凝  
り  
鮒

何  
も  
か  
も  
母  
在  
り  
し  
ゆ  
ゑ  
細  
雪

夜さり  
三四〇句  
畢

あとがき

本集は前句集の『天袋』につぐ私の第五句集である。平成九年より平成十六年半ばまでの三四〇句を納め『夜さり』と書名した。句の陳べ方はこのたびは歳時記に倣って新年の句を頭に置いたのは私の生れが一月一日であることも気分しているように思えてうれしい。書名は集中の、

白地着て雲に紛ふも夜さりかな

の句から抽いた。夜さり、は私の幼児のころに祖父や父が日常に使っていた日本の古く美しい言葉の一つであろうと思う。集中の鶴や母や病雁と同じように私の俳句の本質のところにある言葉で、わけてく親しさを感じている。

本集は私の七十代の作品集で当然の事乍ら老の句もかなり収めてある。老の句を意識して詠まないという人もいるが、七十代の生理は五十代、六十代とちがうのは自明の理であり、ひらき直ると言う言葉は好きではないが、ここまでくれば極く自然に老を詠めばいいと今は思っている。青春の日に青春を讀えて詠んだように、滋味ふかき老を詠みこたしたいと念じている。

本集の上梓には『あらくれし日月の鈔』『天袋』につづいて装丁の伊藤鑛治氏、角川書店のスタッフの皆様のお世話になった。記してお礼を申し上げます。

平成十六年涼月

八田 木 枯

## 著者略歴

八田木枯（はった こがらし）

大正十四年 伊勢の津に生まれる

昭和十六年 「ホトトギス」同人長谷川素逝に師事

昭和二十年 俳誌「ウキグサ」を主宰、橋本鶏二の選を受ける

昭和二十二年 山口誓子の門に入る

昭和三十二年 これより二十年間、休俳

昭和五十二年 盟友うさみとしおと二人誌「晩紅」創刊

昭和六十二年 「雷魚」創刊同人に加わる

平成八年 寺澤一雄・中村裕たちと晩紅塾ひらく

平成十五年 新同人を迎えて「晩紅」復刊

句集に『汗馬楽鈔』『あらくれし日月の鈔』

『於母影帖』『天袋』

句集

夜さり

初版発行  
二〇〇四年九月十七日

著者  
八田木枯

発行者  
田口恵司

発行所

株式会社角川書店

三三八二番 東京都千代田区富士見二一十三一三

電話〇三―三八一七―八五三六(編集)

編集製作

株式会社角川学芸出版

印刷所

株式会社三協美術印刷

製本所

株式会社鈴木製本所

© Kogurashi Hata 2004 Printed in Japan

ISBN4-04-651842-1 C0092